



# 司馬遼太郎全集 第五十二卷

第三期第二回配本 韃靼疾風録

平成十年十一月十日第一刷

著者 司馬遼太郎

発行者 和田 宏

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二三

（一〇二一八〇〇八）

電話（代表）〇三二三三六五一一二二一

印刷所 大日本印刷

製本所 大日本印刷

製函所 大日本印刷

定価は函に表示してあります

万一、落丁乱丁の場合は、送料小杜負担でお取替いたします。小杜営業部宛お送りください

© MIDORI FUKUDA  
ISBN 4-16-510520-1

Printed in Japan

# 韃靼疾風録

司馬遼太郎全集  
52



司馬遼太郎全集第五十二卷

韃靼疾風録

司馬遼太郎の歲月 2 向井敏

590 5

|      |      |      |
|------|------|------|
| A    | 題    | 装    |
| D    | 字    | 幀    |
| 坂田政則 | 中田 功 | 三井永一 |
| 栗屋 充 | 字游工房 |      |

韃靼疾風錄

# 目次

|    |       |     |        |    |    |    |    |      |      |       |
|----|-------|-----|--------|----|----|----|----|------|------|-------|
| 平戸 | 度島ふしぎ | 老財神 | だったん公主 | 船出 | 北航 | 皮島 | 渦島 | 天祥先生 | 波の彼方 | 満鞆子の地 |
|----|-------|-----|--------|----|----|----|----|------|------|-------|

9 20 33 46 64 79 93 109 119 135 150

|       |     |     |      |     |         |     |    |      |        |      |
|-------|-----|-----|------|-----|---------|-----|----|------|--------|------|
| 大汗の都へ | 瀋陽へ | 寧遠城 | 大汗の死 | 瀋陽城 | 大汗ホントイジ | 澡塘子 | 戦塵 | さらに北 | オラハ(草) | 勝敗の闇 |
|-------|-----|-----|------|-----|---------|-----|----|------|--------|------|

164 175 188 203 215 227 238 248 261 271 280



水門を狙う  
北京城を囲む  
国の鎖し  
清朝の出現  
清帝崩ず  
睿親王  
人質  
鄭成功  
蘇州夜雨  
福良  
睿親王の部屋

294 304 317 330 345 361 376 386 400 415 429

北京の妖怪たち  
明帝自殺  
使者唐通  
陳円円  
密使東へ  
使者往還  
大会戦  
北京入城  
北京悪月  
三千世界  
女真人来り去る——あとがきにかえて  
文庫版のために

443 457 464 473 486 497 512 525 543 555 568 588



## 平 戸

島には、入江が多い。

この入江をめざして、財貨を積んだ異国船がやってくる。山を割って幾筋かの小川が流れている。そのふちを泥田にして稻がうえられているが、島での収穫はわずかでしかない。

島は、粗々、入船の財貨でうるおっているのである。

漁も営む。島に住む明人が、島人ノ輕舸矢ノ如シとおおげさに評したほどにたれもが櫓に長じており、とくに夏季、あご（飛魚）が入江に満ちるころは、島中が水軍になったように——現に倭寇の島なのだが——波間に無数の帆が隠顕し、勇壮さは平曲の「壇ノ浦合戦」をおもわせた。

尻とり話のようになるが、壇ノ浦の源平合戦で連想すると、島主の本姓は、源、嵯峨源氏を称している。

しかし、かつては平氏とも称し、また藤原氏を称したこともある。苗字は、松浦である。

「松浦」とは、島主の苗字であるとともに、かつてはこの島——平戸島——をふくめ、あたり一帯の陸地を総称した地名でもあった。

土地のひとは、マツラ・マヅラと発音する。はるか古代、『魏志』「倭人伝」の撰者陳寿は、土地の音に末盧国という文字をあてた。マツラのラとは、おそらく古語において国という意味であつたらう。玄界灘のかたに古代の耽羅国（済州島）がうかび、その北に新羅国があつた。百済国をクダラ国などと和訓したことを思いあわせるべきである。みな、ラがつく。ついにながら、平戸も古代には庇羅という字があてられていた。

「倭人伝」にいう。

又一海を渡る千余里、末盧国に至る。四千余戸有り、山に浜して海居す。草木茂盛し、行くに前人を見ず。好んで魚鰕を捕へ、水深浅と無く、皆沈没して之を取る。

まことにいきいきとした原像である。

ただし、右は古代のことだ。

この噺の時代は、十七世紀のはじめのころのことである。もともとも島の大小の入江の蔭には、生涯舟を家として送るひとびともいたりして、「末盧国」時代と同様、かれらは沈没して魚や鮑をとらえて衣食している。士も農も沈没する。その景色にかぎっていえば右の原像とはなほだしくは変化していない。

月がなく、星もまばらな夜のこの島では、潮騒だけが遠い古代から連続してきた虚空の息吹きのように聞こえる。私は片鬢庄助の数奇な半生について書くこうとしているのだが、庄助という小さないのちを載せているこの島の来歴について触れねば、罪によって片鬢を剃られているこの若者の身辺にまで至りにくい。

島主松浦氏は、戦国期を生き残ってきて、豊臣のころ、小さいながらも大名として認められ、その処遇は徳川の世にひきつがれた。日本国の大名の中でも、最古の家系に属する。

最古といえ、上代にまでさかのぼる、という者もある。遠いむかし、大和の朝廷は、勇悍な、東国の壮丁を筑紫沿岸に移して、防人として外寇のふせぎとした。平安時代に入るとその制は有名無実になり、中央はかれらの存在をわすれた。野に捨てられた防人たち

はそれぞれ党類を結んで武力と土地を私物化し、すでに鎌倉期の前後、「党」といういくつかの武士団を結び、たがいに攻伐しあった。松浦家の祖はそういう、はるかな歴史のざわめきのなかから出ている、ともいうのだが、ともかくこの島の歴史は、末盧国以来、ふり。

島では、大人がこどもをおどすおそろしいものとして、むずかると、「ムクリ・コクリがくるぞ」などという。鎌倉の末期、筑紫を襲った世界帝国の来襲のことをいう。

その事態は、地震のように唐突なできごとだった。対馬島、壱岐島、さらに松浦地方などという島々は津波をかぶったように侵寇され、在郷の武士は非力ながら戦い、多くは全滅した。住民にして惨殺される者数知れず、高樓をあげた侵寇船の舷側には掌に穴をあけられた男女が、数珠玉のようにつりさげられた。

来寇は、両度あった。弘安四（二二八二）年五月の再度の時は、その第一梯団は戦艦九百、海を圧した。搭乗する蒙古兵三万、高麗兵一万が壱岐を根拠地とし、風を見て博多湾に攻めこみ、さらに針路を転じ、松浦の鷹島を錨地として長期碇泊した。江南からくる第二梯団を待つためであった。

かれらの戦い方は、すべて日本と異っていた。密集隊形をくずさず、鼓をもつて進退し、矢に毒を塗り、さらには「てつぼう」という鑄鉄の殻に火薬をつめたものを投げ、その上、艦上では車輪を旋回させて巨石を飛ばした。

庄助は、少年のころ、平戸の瀬をわたって本土からきた「太平記よみ」の口演によって、このくだりを聞いたことがある。『太平記』巻第三十九に「太元より日本を攻むるの事」という、やや本筋から離れたところがある。おなじ「太平記よみ」でも東国を歩く者はこのくだりを読まず、松浦地方にいくと、本筋を端折ってでもこのくだりをたかだかとよむ。

松浦党の勇戦ぶりがのべられている。

……日本ノ兵、多ク焼キ殺サレ、関櫓ニ火燃付キテ、打チ消スベキ隙モ無カリケリ。上松浦・下松浦ノ者共、此軍ヲ見テ、尋常ノ如クニシテハ叶ハジト思ヒケレバ、外ノ浦ヨリ廻テ、僅ニ千人ノ勢ニテ夜討ニゾシタリケル。志ノ程ハ武ケレ共、九牛ガ一毛、大倉ノ一粒ニモ当ラヌ程ノ小勢ニテ寄セタレバ（中略）終ニハ皆生捕レ、身ヲ縲紲ノ下ニ苦シメテ、掌ヲ連索ノ舳ニ貫レタリ。

いわば捨身の特攻作戦をやつて敗れたのである。

倭寇という現象は、元寇の衝撃から興ったといわれるし、元の艦船は台風によって覆滅したが、かの国においては三度目の遠征の計画が本気でくわだてられていた。元の皇帝の下ではいったん廃止されていた征東行中書省も復活されており、さらには日本においても九州近海におびただしい元船があらわれたという風説が、しばしば沿岸の民をおびやかした。松浦党の者は、自然、探索に心がけた。かれらは壱岐・対馬の海民を指揮し、ときには高麗の沿岸へゆき、またしばしば東シナ海を漕ぎわたって長江（揚子江）の河口に出現するようになった。かれらは私貿易をし、かつ国情をさぐったときに乱暴を働いた。元寇以前に倭寇はなく、その後にこの現象がおこったことをみると、因果関係は絶無とはいえない。さらにいえば、この衝撃以前、かれらは海外に関心がうすかった。元寇以後は、異常に過敏になった。

過敏さは、行動となった。櫓をもつて遠くへ漕いでゆく。かれらは、決して大船を用いず、明人のいうところの輕舸を用いた。舟が覆れば波間でおこしてふたび漕ぎ進んでゆく。食糧は、水気をいとわない粟・

繭のごとき粗末な穀物を袋に詰め、舟底にほりこんでおく。小舟ながらときに五十艘ほどが櫓をこぐ声をあわせてすすんだから、渡海のその人数は大船五、六艘とかわらない。

そのうち元がほろび、明が興った。明は、海外に対して開放的だった元とちがい、海禁を国是とした。片板モ海ニ入ルヲ許サズ——海外へ出るな、という明の鎖国はきびしかった。しかし沖から倭寇がくることばかりはふせぐことができなかった。

大陸の沿岸は、長大である。どここの砂浜に上陸するかわからない倭寇を防遏するために、明の中央・地方の官は奔命に疲れた。

といつても、松浦の諸島をはじめ肥前の島々から出かけてゆく倭寇の人数など、ひろい大陸からいえばしれたものであった。これに対し、中国南部の暴民が加わり、月代を剃って倭のまねをし、その人数は大いにふえた。ついに倭寇といつても「真倭」は十に一の割合で、あとは明人だといわれるまでになった。

明の『洋防輯略』にも、

嘉靖三十一（一五五二）年、倭がはじめて漳（福建省龍溪縣、泉州（福建省泉州府）を犯せしも、僅か

に二百人。その間、真倭は十の一、余は皆、閩（福建省をさす）、浙（浙江省をさす）の通蕃（外国に通じている者）の徒。

とある。

この記述を、平戸島の側からいえば、すでに室町末期には他の日本六十余州とはべつの色彩を帯び、日本本土の京や鎌倉よりも、航路でつながれた浙江省や福建省は隣りのようなものであった。季節風に乗って遠い浙江・福建から船が来、荷がおろされ、明の人々が定住し、島に明風の建物もたち、全島が国際化するにいたっていた。

その後、福建・浙江船の平戸への渡航につられてポルトガル船もやってきて、松浦家は大名というより貿易商人のようになり、さらにオランダ船やイギリス船もきて、それぞれ平戸に商館をつくった。平戸は、賑わいにぎわった。

その間、豊臣家の興亡があり、倭寇時代は終熄した。秀吉はみずから大倭寇になったかのごとくに貿易の利を独占しようとし、かつ朝鮮侵略までおこなったが、やがて病死し、家もほろび、徳川幕府が樹立されて、江戸という平戸からはるかに遠い東方の農業地帯に政

都がおかれた。歴史が、かわった。以後、九州における貿易も、往年からみればはなはだしくだり坂になつてゐる。

庄助は遅くうまれた。平戸島における華やきがおわたつたか、終ろうとしてゐる時期に成人した。

平戸は、ほとんどが山坡である。

宮ノ前とよばれるわずかな平地ばかりは石垣を組みあげ、土で嵩あげされ、石畳でかためられて、ポルトガルの港市でいうところの取引広場になつていて、笹の葉で編んだ帆の福建船も、アンペラ帆の浙江船も、あるいは綿布の帆をもつ南蛮・紅毛の船も、ここに横付けされる。

しかしながら武家の屋敷も、足輕の長屋も、山の腹を削つたり、あちこちの谷や山中の窪みにつくられていて、この地の人は、元来、倭寇の後裔とはいへ、鹿のように足達者だった。鹿といへば、この島には芝山が多いため牛馬が放牧されており、隣接する島の生月島は、とくに名馬を産出することで著名だった。

庄助の亡父は桂瀬右衛門といい、母は庄助を生むと死んだ。瀬右衛門は松浦家の厩役人で、先代の当主の別当をつとめ、大坪流の馬術の極意をきわめていたと

いうが、庄助にはほとんど父についての記憶がない。

庄助は、母方の祖父である道喜という人物に育てられた。六尺を超える大男で、諸事、道喜は、異風の人だった。若いころ、許しを得て入道したが、先代によほど見込まれていたらしく捨て扶持はもらつてゐた。閩南語と浙江語に通じていただけでなく、学問があり、さらには地理にあかるく、たとえば大明国のことどもを鮮やかな物言いで庄助に語つてきかせた。道喜は最後の倭寇であつたかもしれない。

庄助の幼時の思い出は、道喜のことと詰まつてゐる。

道喜は、異常に尊大な男だった。庄助は道喜にほりあげられて肩車に乗つたりしたとき、道喜の頸筋が馬のように感じられた。

道喜は庄助を肩車して宮ノ前を歩くのが好きだった。あるとき、供五人をつれた中老殿に出遭つたことがあるが、道喜は不遜にも軒下に身すら避けず、わずかに会釈をしただけで通りすぎた。中老殿の従士が色めき、「道喜」とよばわつた。

「せめて、子をおろしたらどうだ」

しかし道喜は行つてしまった。ひとつには、この時代、平戸では上下の礼が薄かった。平戸藩士が、九州

でもめずらしいほどに行儀がよくなるのは、松浦家二十九世の天祥鎮信が山鹿流を入れ、山鹿素行の次男藤助を招聘してからだといわれる。

それにしても道喜の中老殿へのふるまいは尋常ではない。

「わしは入道している」

庄助が長じたころ、当時のことについて道喜にきくと、そういった。

「入道というのはもともと世外の者だ。表を歩いていても、人に見えざる者が歩いてゐる。中老殿の目は、わしを見るべきでなく、また見えもせぬ。もし見えたとすれば、中老殿は間違うた者をみてゐる」

庄助には、わけがわからなかった。

「わしは、わしを食わせてくださる人をもみ尊崇してゐる。それは、ただお一人だ」

藩主のことをいっているのだらう。

松浦家は、歴世、英雄的な当主にめぐまれてきた。

この家の当主は代々肥前守を称してきたが、そのなかで、道喜が、

「法印様」

とよんでいる人物こそ、かれにとって二なき人だった。松浦家二十六世、肥前守鎮信（前掲の二十九世と同

名）である。道喜は、庄助に、いわば神話時代の牛頭天王のような巨人が、遠い闇の中からのしと出てきて現世の塵劫の中を歩いたかのようにして、二十六世鎮信の言行を話し、その英雄譚をほとんど語りつくした。二十六世鎮信が鉄砲が入ってほとんどない天文十八（一五四九）年にうまれたこと、十七歳のときから戦場に出て以来、一度もおくれをとったことがないと、父の道可とともに松浦地方の大小の党類を平定したこと、若いころ、秀吉の天下統一に遭会し、秀吉の軍に従い、宮崎で秀吉に謁見したこと。このとき、秀吉によって平戸・壱岐を中心とする松浦家の所領が確定したこと。……

「以下のことは、いまの世に憚りあり、口外するな。法印様は、家康どのより太閤さまの方がお好きであつた」

のち、法印鎮信が伏見城下に屋敷地をあたられたとき、秀吉の奏者を通じて、「先キニ謁見セシモ未ダ其ノ容貌ヲ熟知セズ」として再び謁を乞うた。この日、暑氣つよく、秀吉は涼を入れるべく城内の亭にあり、黄金の大杯をとって冷水をのんでいた。秀吉はのどを鳴らしつつ、「ヨクワガ容貌ヲ見ヨ」といい、飲みほして、その杯を鎮信にあたえた。それだけのことはなしだ



が、道喜は、

「法印様は大気者におわした」

と、くりかえし話した。

道喜は若いころ、

「印山寺屋敷詰」

という職にあつた。

庄助の幼いころも、道喜はすでに入道して無役ながら、この屋敷をおのれの親の家であるかのように出入りし、そこに住む浙江人と浙江語で話し、庄助にも浙江語を学ばせた。庄助は武芸だけでなく、物覚えの上達も早かった。

印山寺屋敷は港を見おろす山の中腹にあり、かつては二十五代の当主道可の館だったが、徽州（安徽省）出身の海賊の大頭目王直（号は五峰）にこの館をゆずった。道可が屋敷をゆずったのは天文十年のこと、

「法印様」がうまれる八年前のことである。

この王直が、平戸にポルトガル船を誘引してきた。「法印様」の二、三歳のころのこと、以後、しきりにこの南蛮船がやってきて、平戸はただの小島ながら西の都とよばれるくらいに栄えた。ポルトガルとの関係は、十五年つづいた。もともとポルトガル側にはつ

よい魂胆があり、「ただただ切支丹に改宗なさるべし。さもなければ、これ以上の交易はすまじ」としばしば言い、松浦家はそのつどはねつけつづけたので、結局は関係が冷えた。

九州の諸大名が風疹の流行のように切支丹宗になりつつあるときに、松浦家の頑固さは異とすべきものであった。宗教に鈍感ということではなく、むしろこの家系は宗教好きの体質が濃く、道可は仏教の保護者であつたし、「法印様」は曹洞禪の居士で、晩年は法印を称したほどであつた。また「法印様」のつぎの天祥鎮信は、真言密教のほとんどの行者のような人物だった。ポルトガル側が、平戸を不快とし、双方の感情が削ぎたつてきたころ、宮ノ前で平戸の町民とポルトガルの船長以下とが大喧嘩になり、ポルトガル側に十数人の死傷者を出すという事件などもあり、ついにポルトガル船は平戸をすてた。

そのうち、南蛮側と海戦まで勃発した。永祿八（一五六五）年マカオからきたポルトガル船が、切支丹大名の港である大村にゆくべく平戸海峡を通過したとき、松浦家はにわかに倭寇になった。五十艘の小船をくりだしてポルトガル船の停船を強要したところ、ポルトガル船はあらゆる火器を発射して戦い、危機を脱した。